

3月2日 (Sun) Sachsenhausen

【巡検プログラム】

9:10	トラムM13 Landsberger Alley/Wei ß enseerweg駅 → Frankfurter Alley駅
9:15	地下鉄U5 Frankfurter Alley駅 → Alexanderplatz駅
9:35	S7 Alexanderplatz駅→Friedrichstr. 駅
9:45	S1 Friedrichstr. 駅→Oranienburg駅
10:30	Oranienburg駅着
11:15	ザクセンハウゼン強制収容所・博物館見学・・・・・・・・・・・・・・①
14:00	Oranienburg駅着、昼食購入
14:20	S1線 Oranienburg駅→Wannsee
15:50	S42線 Südkreuz→Schöneberg駅
16:10	S1線 Schöneberg駅→Wannsee駅
16:30	路線バス 118番 Wannsee→? ※乗り間違い
17:10	路線バス 114番 Wannsee→Haus der Wannsee Konferenz
17:20	ヴァンゼー会議記念館見学・・・・・・・・・・・・・・②
18:00	S7線 Wannsee駅→Alexanderplatz駅
18:40	U5線 Alexanderplatz駅→Frankfurter Alley駅
19:00	トラムM13線 Frankfurter Alley駅→Landsberger Alley/Wei ß enseerweg駅
19:10	ホテル着
19:30	タクシーでOstbahnhofへ
20:00	Ostbahnhofにて夕食
21:06	ENベルリンOstbahnhof→ウィーンWestbahnhofへ

【巡検内容】

①ザクセンハウゼン強制収容所 <GEDENKSTÄTTE UND MUSEUM SACHSENHAUSEN>

1933年3月21日、ナチ突撃隊(SA)が工場跡地に建設したのが始まりである。親衛隊が突撃隊を肅清した(『長いナイフの夜』)後、1934年7月13日、一旦閉鎖される。この間、3000人以上が収容されたという。

1936年7月、親衛隊全国指導者ハインリヒ・ヒムラーの命令を受け、新しい収容所が建設される。この新しい収容所は、他の収容所のモデルとされた。



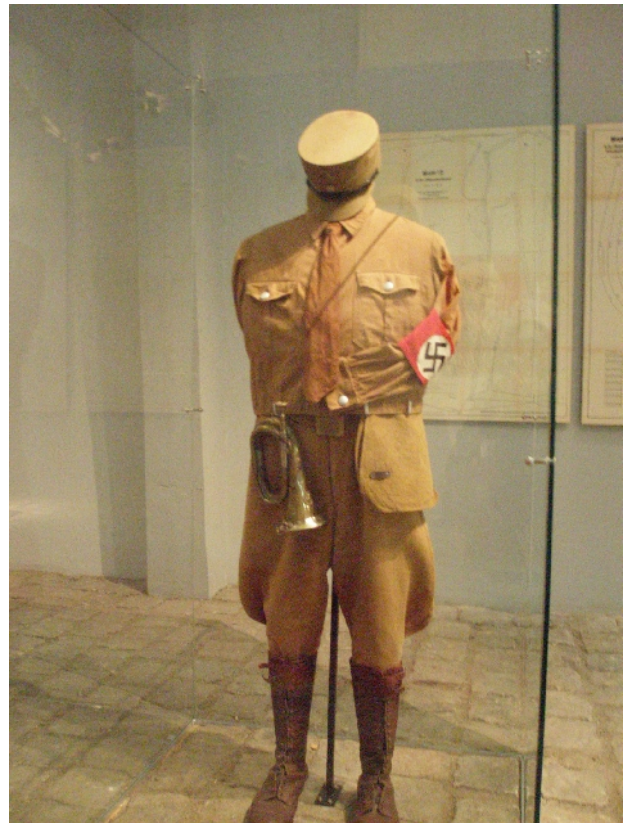
1936～1945年の間、20万人以上の人々が収容された。最初のうちは、政治犯がほとんどであったが、国家社会主義者らにより人種・生物学的に「劣った」人々が収容され、そして1939年からはヨーロッパの占領各国から送られてきた人々も収容した。多くの収容者が飢餓・病気・重労働・虐待により死亡した。ときには親衛隊により機械的に殺されることもあった。犠牲者は10万人以上になるという。

↑ どの収容所の門にも「労働は自由をもたらす」の標語が掲げられた

1945年4月末、死の行進により数千万人が死亡した。収容所に残されていた病人・医師・医師の助手ら3000人は、1945年4月22、23日にソ連軍・ポーランド軍により解放された。

親衛隊の制服→

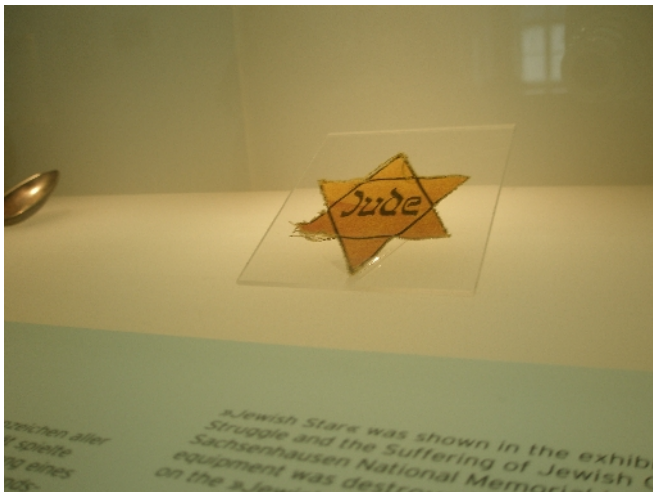
↓絞首台跡地の記念碑



強制収容所跡に隣接する博物館には、ナチ親衛隊の制服(写真)や、当時ナチスが発行していた新聞、ヒトラーユーゲントの手帳、収容者が着ていた服、足かせ、収容所の周りに張り巡らされていた有刺鉄線などが展示されている。

ザクセンハウゼン強制収容所は、最寄のオラニエンブルク駅から20分ほど歩いた、住宅街の奥に位置していた。訪ねたのは日曜だったが、悪天候の影響もあってか人影はまばら。とても静かだった。

インフォメーションセンターには、当時の収容者の書き残したメモや、ユダヤ人が身につけることを強制されたダビデの星(下写真右)、洗面器・便器もかねていたという食器(下写真右)などが展示されていた。



収容所の門を抜けると、点呼場が目の前に広がる。今は残っていないが、この点呼場から放射状にバラックが広がっていたのである。その広さに圧倒された。左の写真は、政治犯を表す赤色の逆三角形が描かれた塔。塔のふもとには、解放ソ連軍兵士が二人の男性を抱き寄せるような格好をした記念碑があった。



点呼場・バラック跡を抜けると、ガス室と焼却炉がある。ガス室跡のすぐそばに、芝生が広がっており、収容者の遺体から出た灰がまかれている。そばにはコンクリートの台のようなものが設けられ、訪ねた人が載せたであろう小石が置いてあった。



ガス室の近くに焼却炉があり、千羽鶴とろうそくが供えられている。近くのパネルには、遺体を焼却炉に運ぶ様子を描いたイラストが展示されている。

ガス室にチクロンBを入れたであろう穴。チクロンB 1kgあたりで400人の致死量に相当するという。ここにもやはりろうそくが供えられていた。この下がガス室で空洞になっているため、ひびが入り、少し沈んでいるのが見て取れる。

ガス室の屋根にあたる部分しか見ていないので下はどうなっているか分からないが、上から見た限り畳6畳ほどのスペースしかなく、狭いように感じた。



収容者の遺体を用いて人体実験をしていたバラックには、優生学・遺伝学関係の資料が展示されている。

左の写真は様々な「人種」の眼球サンプル。このほかにも、皮膚や髪の毛などのサンプルがあった。



強制収容所に残るオリジナルの建物は、「記憶の保証人」と考えられており、その修復作業には連邦政府が出資している。

ザクセンハウゼン強制収容所には、収容者の衣服や所持品から当時の新聞・映像資料に至るまで、展示が充実している。バラックはほとんど残っていないが、鉄条網・コンクリート壁に囲まれた広大な敷地に立つと、そこに収容されていた人の多さは想像を絶するものであると感じる。今は何の音も聞こえずとても静かだが、70年前にはサイレンの音や親衛隊の怒声が響き渡り、ライトが収容所一帯を舐めるように照らしていたのである。

今回収容所を訪れて、見学者が少ないことに驚いた。全ての人が見て知って考えなくてはいけない問題である。なぜこのようなことが起きてしまったのか。過去の過ちと向き合い、二度とこのようなことが起こらないよう努めるのはもちろんのこと、今世界中で起きている人権問題について改めて考えてみて欲しい。

②ヴァンゼー会議記念館 ＜Gedenkstätte Haus der Wannsee-Konferenz＞

1941年7月30日、国家治安本部長ラインハルト・ハイドリヒは、ドイツ第二の権力者ヘルマン・ゲーリングから「ユダヤ人問題の最終的解決の実現に必要な組織と方策を示す全体的な計画案を直ちに提出せよ」との命令を受けた。「ユダヤ人問題の最終的解決」とは、ヨーロッパの全てのユダヤ人を毒ガスによって絶滅させるという計画である。1942年1月20日、ハイドリヒはヴァンゼー会議を招集した。この会議の結果、ユダヤ人を東へ強制連行すること、男女を別々にすること、健康なユダヤ人は道路建設などの労働をさせて自然減少により始末すること、生き残ったものたちを殺すこと…といった計画が練られた。



ヴァンゼー会議記念館はベルリン郊外のヴァンゼー湖畔に位置する。当時から富裕な人々が住み、邸宅が並んでいたという。周囲は森に囲まれ、静かなところである（今回の巡検では、森でイノシシに遭遇した。それほど自然豊かなところである）。

右の写真は一見すると、立派な高級住宅にしか見えない。すぐ近くにレストランや住宅、教会があり、周囲に溶け込んでいる。こんな閑静高級住宅地で、あの恐ろしいホロコーストが誕生したとは想像がつかない。湖を見下ろしながら強制労働やガス室について語り合ったのであろうか。ナチの高級官僚が一堂に会して、優雅に食事をしながら話し合ったことだろう。今回は入館時間を過ぎていたため館内には入れなかったが、当時の資料が展示されているとのこと。

